

三井のリフォーム住生活研究所長 西田 恭子

「妻へのプレゼント」

当研究所が発行している『ライフスタイルレポート』の次回号の作成にあたり、六〇歳以降のお宅を取材して回っているのだが、その中で気になるご主人様の言葉があった。リフォームした理由について、「妻へのプレゼントとしてリフォームしました」とおっしゃるのである。

リタイア前後の家のリフォームは資金的なめども付けやすく、安心して進めることができるのだが、リフォーム内容は奥様の長年の暮らしへの思いを叶えるために進むケースが多く、なかなかご主人様の意見が聞けなかったり、お会いできなかったりする。そのため、ご主人様の承諾をどの段階でいただいたらいいのかを悩む場合もある。

夫と妻の家づくりの意識込みの違いを感じてしまうのだが、どうやらこの家であと何年暮らすかということの考えが違うようだ。

六〇代以降のご夫婦は同年齢かご主人様が年上という場合が多く、平均寿命を考えると女性は五年から一〇年ぐらいいは夫を亡くしたあとの人生が待っている。

一〇年どころかもっと長いかもしれない。この家であと二〇年、もしかすると二〇年と思っているご主人様と、二〇年あるいは三〇年と考えている奥様とでは、思いのたけが違うのは当然だ。

またほとんどのご主人様は、自分が奥様より先に亡くなる予定にしている、老後は妻のもとで、最後まで生活出来ると考えているのである。

奥様は夫婦ふたりの限られた人生を大切に充実させたいと思いつつ、その後一人になっても快適にと、本腰を入れてリフォームにとりかかっている。

そんな真剣な妻の意向に反対意見を言うほどの意気込みに欠けるご主人様は、はなから意見を出さないことを決め込んでいたりするので。

一方、奥様も意見は聞きたいが、自分の裁量で決定したいと思っているの、聞いてもいない事に口を挟まれたくないという気持ちも働く。

リフォーム後、ピフオー&アフターの写真を比べて見ていただくと、明らかに

リフォーム後は素敵な生活が繰り広げられている。リフォームしてよかった!と二人して言っていただけののだが、そこまでに至る家のリフォーム計画途中の楽しさには、夫婦間でばらつきがあるように思える。

ある賢い奥様は、大体のプランと金額が固まってからご主人様に登場していただいていた。

その奥様は、昔、リフォームをした時の失敗は、「最初から主人に同席してもらったからです」と言う。奥様はご主人様をたてるつもりで、「どう思いますか?」と聞き、ご主人様はたいして関心がなくても聞かれたからには意見を言わなければならぬと話す。

スポンサーの意見は通りやすく、奥様の意向は却下となり、結果的に不満の残るリフォームの仕上がりとなったとか。

家のリフォームを「妻へのプレゼント」と語るご主人様はとても素敵だ。長年の妻への愛情と感謝の表れだと思うが、家づくりが妻の夢の実現だけに終わっていないだろうかと、少し心配になった。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。